様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５　月　28　日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520407
研究課題名（和文）　朝鮮語と日本語の受動文の生成的対照研究

研究課題名（英文）　A Contrastive Study of Korean and Japanese Passives

研究代表者
和田　学　(WADA MANABU)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：10284233

研究成果の概要（和文）：本研究では、韓国語の語彙的受動文の項構造を中心に扱い、対格を持つ所有者受動文主語が、他動詞・非能格動詞と同じ振る舞いを示す現象を明らかにし、所有者受動文の主語が外項であることを示した。これにより、日本語の受動文でも同じ可能性があることが示唆された。また、受動文の関連領域として、複合動詞に関しても対照研究を行い、日本語の複合動詞研究において等閑視されていたタイプの語彙的複合動詞が、韓国語の複合動詞と同じ性質を持つことを示した。また、文法性の調査方法にも洗練を加えた。

研究成果の概要（英文）：I have dealt mainly with the lexical passive in Korean, and have shown that the possessive passive with an accusative NP behaves in the same way as the transitive and unergative verbs, which means that the subject of the passive is an external argument. This implies that the Japanese counterpart also has an external argument as the subject. I have also shown that a class of compound verbs, which have been ignored as exceptions, have the same properties as the typical compound verbs in Korean. I also have sophisticated the method of interview for grammaticality judgments.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：韓国語、日本語、受動、複合動詞、語彙的緊密性

１．研究開始当初の背景

一つの言語を対象としてその特徴を明らかにしようとする研究は多くの成果を収めてきているが、他の言語と対照することによって、人間の言語が許容する文法と許容できない文法が明らかになるだけでなく、個々の言語だけを見ていたのでは気が付かない現象が発見されることもある。

日本語と他の言語の対照研究において、これまで、英語の様な大きく異なった言語との対照が中心的であり、マクロなパラメータを明らかにする上では大きな役割を果たしているが、ミクロなパラメータを明らかにする上で、有効と考えられる、日本語と韓国語の様に極めて統語的に類似した言語同士の対照研究は限られている。日韓の対照により、両言語の詳細な異同が明らかにされることが期待できる。

日本語/韓国語の研究者の間でも、一方の言語を議論に用いることがあるが、両言語に精通していないため、不適切なデータがしばしば見出され、発展的な対照研究は質・量ともに不足している。

２．研究の目的

上記の様な問題意識から、本研究では、将来の日韓対照研究に貢献できる、データの蓄積と整理を目的とし、そのケーススタディとして、受動文を中心とした述語の対照を研究目的とした。

韓国語も日本語も様々な受動の形式を持つが、本研究では、表面的な異同を記述するだけでなく、日韓の受動文の項構造、受動形形成のレベル、等受動文形成のシステムを対照し、両者の述語のシステムの異同を明らかにすることを目的とした。

また、受動形式と複合動詞の関係が日本語と韓国語では大きく異なり、日本語の語彙的複合動詞では第一動詞に受動形が現れることはないのに対し、韓国語ではこの位置に受動形が現れ得る。この相違は受動形形成と複合動詞形成の順序関係が異なっていることから生じる可能性が考えられるため、複合動詞の対照研究も目的とした。

３．研究の方法

韓国語は受動文と自動詞文の述語の形式に形態的な違いがなく、先行研究ではこれらの構文の分類において錯綜した部分があるため、述語の形式のみならず、構文全体を見て、受動文の範囲を限定することから始めた。新旧の文献から広く網羅的に、データを集め、不足する部分は母語話者に対する聞き取り調査を行い、調査内容を体系的に整理した。

韓国語の受動文の項構造を調べる上で、一見受動文とは関係のない否定構文をテストとして用いるなど、様々な角度からアプローチを試みた。

複合動詞に関しても、例外とされているものも含めて網羅的にデータを収集し、日本語との詳細な対照を行った。

母語話者に対する調査の方法にも工夫を加えた。調査票を体系的に作成し、対面で調査を行い、文法性の判断を数値化し、処理を容易にすると同時に、話者の間で一致した判断が得られることを視覚化した。

理論的には生成文法の立場を採ったが、最新の理論の流れを追いかけ、それに合致する事実だけを追い求めることを避け、取り出された事実を網羅的かつ合理的に説明できるモデルを作成するという方針を採った。

４．研究成果

(1)韓国語の所有者受動文(A-ka B-eykey son-ul cap-hi-ess-ta:AがBに手をつかまれた)には、対格が現れるが、生成文法の主流派の理論ではこの現象は予想外であり、様々な提案がなされて来た。本研究では否定構文に随意的に現れる格に関する現象を用いて、所有者受動文が他動詞・非能格動詞と同じ性質を持ち、対格の出現は自然に説明できるとともに、上記理論が不十分であることを示した。また、同様に、単純受動文に関しても、他動詞・非能格動詞との類似性が成り立つことを指摘した。

日本語の所有者受動文も対格が出現するが、上記の結論は、日本語にも韓国語と同様のシステムが存在することを示唆した。

(2)韓国語の複合動詞は第２の動詞が本動詞的なものと助動詞的なものに分けられる。前者に関しては、語彙部門で形成されるとする説と統語部門で形成されるとする説があるが、本研究では、先行研究で指摘されたさまざまな事実を統合した上に、更に、意味的に不透明な複合動詞に関する事実を指摘して、前者の語彙部門で形成されるとする説を支持した。

この際、問題となるのが、語彙部門で形成される複合動詞を構成する動詞が限定的ながら、統語的に独立していることを示す事実(限定詞による分割等)が存在することである。従来、広く受け入れられている語彙的緊密性はこの様な独立性を許すものではない。

日本語の複合動詞は一般に上記の語彙的緊密性に厳密に従うとされて来ており、これらに従わない様に見える複合動詞（例：やってくる、食ってかかる等）は例外として、等閑視されて来た。

これらの例外的とされて来た複合動詞を韓国語の複合動詞を対照すると、様々な特徴に関して酷似していることが分かり、それらは例外ではなく、人間の言語における複合動詞の作り方として一般性を持つことが分かった。

日本語と韓国語の複合動詞の類型を特徴ごとに整理し、語彙的な複合動詞としては日本語２種類（語彙的連用形複合動詞(飲み歩く等)、語彙的テ形複合動詞(やって来る等))、韓国語１種類、統語的な複合動詞も、日本語２種類（統語的連用形複合動詞(読み始める等)、統語的テ形複合動詞(読んであげる等))、韓国語１種類であることを明らかにした。ここで得られたデータから、語形成部門を独立した部門とするモジュラー形態論の立場を支持すると共に、複合動詞の振る舞いの違いに、第一要素の活用形が関与していることを示した。

また、語彙部門で形成される複合動詞が限定詞などで分割できることを示すことにより、一般言語学的に広く受け入れられている語彙的緊密性の定義に修正が必要であることを導き出した。

また、複合動詞の意味的な側面についても成果がある。日本語の語彙的複合動詞の意味的の研究は進んできているが、二つの動詞は時間的に密接につながっていなければならないとされている。しかし、韓国語では、時間的に離れた関係にある動詞も複合動詞を生産的に形成できることを示した。

(3)これまで、生成文法を始めとした理論言語学の立場に立つ研究者は、母語話者の文法性判断を引き出す際の調査方法に関して言及することはほとんどなかった。研究者自身の直観は重要であるが、自らの理論的な立場により、判断が左右されることもあり得る。また、母語の文法性判断は、極めて特異な行為であり、母語話者であっても、正しい判断が得られるとは限らない。

本研究では、特に韓国語に関する調査を行う際に、母語の文法性判断に慣れた言語学者を対象とし、整備した調査票を用いて対面調査を行い、文法性判断を数値化することで、話者間の判断の傾向が一致するかどうかが分かりやすい様に、視覚化した。この調査方法は、下の図に示す様に、話者の間の文法性判断が一致すること、話者の中には判断が一貫せず、従って、調査対象としてふさわしくない話者が存在することなどを、比較的容易に示すことができる、有効な調査方法であることも成果として得られた。

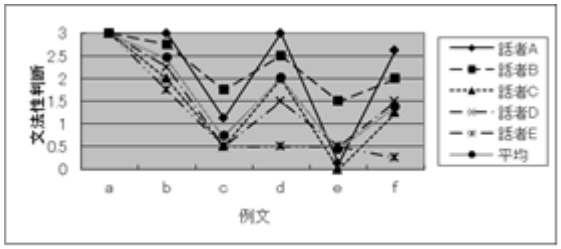

図１：話者ごとの文法性判断グラフの例

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①Wada, Manabu 2012 “A Comparative Study of Korean and Japanese Complex Predicates,” Harvard Studies in Korean Linguistics 14, 475-486. 査読あり

②和田学 2011 「複合動詞の意味的な対照-韓国語と日本語-」、科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、 課題番号 20520441 研究代表者太田聡 、54-60. 査読無

③和田学 2011 二つの語彙的緊密性-韓国語(と日本語)の複合動詞- 山口大学文学会志 61, 83-104. 査読無

④和田学2011 韓国語の語彙的複合動詞 九州大学言語学論集 32, 249-265. 査読無

⑤和田学 2010 韓国語のいわゆる軽動詞構文の分類 山口大学文学会志 60, 75-91.査読無

〔学会発表〕（計１件）

①Wada, Manabu A Comparative Study of Korean and Japanese Complex Predicates, Harvard International Symposium of Korean Linguistics, 2011/8、米国、ボストン

６．研究組織

(1)研究代表者

和田　学（WADA MANABU）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：10284233